



目次

隨筆

研究

滿蒙研究
森林家の常識

文苑

所感一片

柔道

和歌

雜報

學校便り
會員消息
其他

【1】 日五廿月六年七正亥 號四百第 {日四十月六年四十四治明} 日五廿月每 行發期定

發行所 長野縣西筑摩郡川崎町二八九番地 印刷所 長野縣西筑摩郡川崎町二八九番地 書店 長野縣西筑摩郡川崎町二八九番地

隨筆

視察雜感

宇志生

○熊谷を發して東都に向ふ、時恰も麥の中耕時期なり、手拭被りの村嬢頻りに鍬を振ふ、然して服装は洵にツボラなり。袖の著物に腰巻鬘々として風に翻る、此の著物では到底碌な稼が出来るものにあらず。都に近き程虛榮盛んに殊に嫁入前の娘は、如何にして異性の眼に映せんかを考ふ、止むを得ざる情性の發露なりと云へば夫迄なれども、こんなことにては到底獨逸の眞似は出来まじ。

此點に於ては東北のモンペ、信州のカルサンは和式一號の勞働服なり、然るに此の如き理想的勞働服を纏へるものは、其頭空虛なるもの多し、儘ならぬ浮世なり。○農事の改良は農夫の頭と、服と、器具、三部の改良に歸す。

頭の改善を世情と活用に迂き、農林學校補習學校の先生に委す、偶々活用の縣又は政府の官吏新智識を注入せんとすれば悞れて頓首するのみ、(實際は縣の役人も郡の役人も近頃は浮腰腰折のもの多くして眞實農夫の爲に教導せんとするもの寥々として曉星の如し)服の改善を唱導するもの天下極めて少し、器具に至りては各種の職業中最も原始的に屬し、丁髷式のもの尙極めて多し、甚しきは太古的のものあり。

其本を治めずして口に農業の振興を説くも畢竟馬に念佛のみ、百年河清を待つのみ。活きたる才あるものを選びて、指導啓發の任に當らしめ、農家の制服を制定して其勵行を計り、つまらぬ補助を廢して新式器具の交付又は貸與を計るにあらずんば、日本の農業は長足の進歩を見る能はず。

○上野の櫻チラホラと咲く、然し客年の大暴風害に損傷せられたるもの少からず、馬と競争して勝てる自轉車を生み、自動車を出し、魚籠と争ひて勝てる、潜水艇を工夫し、鳥を凌ぐ飛行船飛行機を按出し人類の智囊、あらゆる天然を征服し得ざるものなきの時、僅かに高さ三四間に過ぎざる梅樹も櫻樹も一日にして作り上げるの能力なし、唯時の力に委するのみ僅かに空氣の流動に過ぎざる風と、水蒸氣の凝結したるに過ぎざる雨も、亦如何ともする事能はず、征服し能はざる自然なり。

即ち人類の降伏したる自然を管理するが吾等の職務なり、何だか人類が皆我等に降伏したる様にも思はるゝなり。○悟り得たるが如き心持を以て街路に出づれば人は雜沓し、電車は轟々に、泥濘は靴をかみ、タクシーは奇聲を發し、煤煙は眼をかすめ、如何にも田舎者別けても

定價金三錢

山男を威嚇するが如し。併し穿入して内面的觀察を加ふれば都人士の憐むべき部分極めて多し、僅か壹錢か貳錢安き慈善的パザーに怪我が出来る程に難香、混亂して、生の愛着に獸的本能を耻かしくもなく暴露するが如きは其一例なり。

○文明は一面に於て進歩し一面に於て退歩す、物質的に進歩し精神的に退歩す。毒瓦斯出で、二十哩飛ぶ砲彈走り、タンク活動す、然るに獨逸に於ては側面的結婚獎勵せられ、獸的繁殖方法行はる、然るに林業は物質的にも退歩するもの多し、樺林が雜木林となり、赤松林となり、猪疥地となる。

○國府津より電車に乗じて夜の、小田原を過ぎ箱根の某ホテルに投じ、滾々たる湯槽に浸れば塵境を脱却して世は吾爲に存するが如し、利の前に戦々競々、眼血走り足も空なる亡者達は湯の中に浸すが一番に宜しかるべし、

○朝快よき床を離るれば、初めて鶯の音を聞く、山深く流瀉流瀉たる處余音爛々として快更に快を加ふ。

○往年河川暴溢して福住を流し妓萬龍救はれ新聞に好題材を興へたり。此山の中にも亦天然破壊の應報率に支配されるものあるを見る、世の如何はしき成金共の蝸集せる夏期、更に一回泥水を面上に注ぐ氣骨ある山の神もあらまほし。

○箱根は湯と共に本製玩具を以て表はる、一ヶ年の産額百萬圓を超ゆべし。然しセセツシヨンのなる寄木細工は最早其運命も長かるまじ、活動的新案の操物玩具が其生命となるべし。米國の輸入制限は茲にも影響して青息の間屋も少からず、起伏、盛衰、免れ難くもあるものかな (未完)

研究 滿蒙研究

在大連 川口勇二郎 第一節 總論

位置。大連は南滿州の南端遼東半島の最南隅に位し北緯三十八度五十六分東經百二十一度三十六分門司を距ること六百十四哩、上海を距ること五百三十哩の地點にある。沿革。大連の良港なることは今より五十餘年前英佛聯合艦隊の一次的占領に依つてウヰクトリア灣の名の下に初めて世上に紹介されたのである、昔は青泥窪 (Chingwa) と呼び人煙稀少なる一小漁村であつたが明治三十一年露國は露清條約に依つて租借地となし(露人は此地をターツニーと稱した)三十三年以來旅順軍港と好一對なる大商港を建設せんとして東清鐵道に命じ約一千萬圓を投資して築港工事を起し外に約一千萬圓を以て市街建設の大事業に著手し翌年に

は更に一千萬圓を投じて第二回擴張工事を進行大に發展の基礎を作つた、會々日露の國交斷絶し遂に明治三十七年二月干戈相交るに至つて露人は悉く旅順に退去し諸般の工事は中止され鼠賊は市内各所に起り掠奪横領至らざるなく全市殆んど燒殘の慘狀を呈した、全年五月二十九日我軍の此地を占領するや翌三十日軍政委員を派遣して軍政を布き翌三十八年二月十一日地名を大連と命名して平和克復と共に關東都督の治下に移して大体露國式を繼承して道路家屋を修築したり上下水道の設備をなしたりして銳意秩序の恢復と諸般の整頓改善とに意を注いだ、越つて明治四十年四月南滿州鐵道株式會社が設立されてから鐵道の改築は勿論のこと電氣瓦斯其他各種の公共的事業を経営し埠頭防築港内の浚渫其他所謂世界的商港として必要なる諸種の設備並に機關を新設改善して以來八星霜其間に於ける進歩發展は實に驚嘆に堪へない。氣象。吾人の衛生並に活動上多大の影響を及ぼす氣候に付て述べれば地位より云へば秋田地方と同緯度にあるも海陸兩者の支配を受け支那内地より良好なる氣候である殊に、珍とすべきは降雨の僅少なことである冬季は北風凜烈なる日が多いが氣温は攝氏零下十五度に達する事は極めて稀で港内海面に薄氷を見る事もあるが一般に風向が變じて南方に轉する時は如何に寒威厳しき時でも一變して溫暖となる、當地に三寒四温

Table with columns for months (一月 to 十二月), average highest/lowest temperature, total precipitation, and wind frequency. Includes a small text block on the right side of the table.

の俗諺ある所以である、斯くて春に入れば氣温忽ち上昇して恰も信州の山の中の様に一時に百花の爛漫を見るのである、降水量も漸次増加して八月頃が其頂點で二期と稱する、此季節は氣温も上昇して攝氏二十四五度以上に昇ることも珍らしくはないが海洋の影響を受け日没後は涼風徐に到りて日中の暑さは何處へか去つて氣温大に降下する、九月の中頃から秋冷に入り一ヶ月餘再び冬季となるのである要するに當地は寡雨乾燥で且つ寒暑の差が甚しいけれども海岸風の關係上冬季にありても春日和の時もあり夏期でも日没後は大に冷涼を覺ゆるのである左に明治三十七年より大正四年までの當地觀測所調査の主要なる氣象を示せば

人口。附職業。大連は素小數の支那人の漁家若くは農家の部落に過ぎなかつたが明治三十一年露西亞が租借して以來露人の來住するものが日々増加して日露戰爭前には大凡四千餘戸一萬七八千は在住せし模様である。其後我が經營の下に諸種の文明的施設が整備する様になつて支那人の來住者は逐年増加した明治三十九年末には八千二百三十三に過ぎながら現今では約四萬四千の多きに達して居る、支那人の居住者も漸次増加の趨勢を示して労働者(苦力)の如きは去來常なく従つて正確なる數字を以て示す事は出来ぬが明治三十八年頃は一萬以内であつたが昨今は人口無慮五萬を算するのである歐米人は極めて少數であるが比年増加の割合を示して居る。

第二節 市街

市街は重に露國時代の設計を襲用して居る露治時代には今の所謂ロシア町を行政地區とし他を店舗地區、住宅地區に大別した、其設計は圓形大廣場(直徑七百尺)を市街の中央とし此廣場より放射狀に山縣通、敷島町、奥町、大山通、播磨町、公園通等を支出し之を經として多くの小街を緯織し蜘蛛網の如く市街を設計したのである。道路は歩道車道に區別し路面の築造は歩道にありては凡てコンクリート方塊板を敷き詰め車道はマカダム式舗道とし其上面にコールタールを撒塗してあるから其完備せる事は内地では到底見る事は出来ぬ、歩道の一部に並木として白楊アカシヤ等を植栽し市街の美觀と衛生とを保持して居る、殊に歩道車道の間に排水側溝を設けてある、

下水排出口は雨水は直ちに海岸に放流するも汚水は鐵管によりて遠く海岸を去る三百間の地點に導き最大干潮面以下二尺の處に放出するのである、上水は水源地を遠く沙河口に設け貯水池は伏見台に設けらるる共に露治時代の設計に従ひ關東都督府の管理に屬する。

競うて最新式建築法に則り市街の要區は大夏高樓比し海外に於ける唯一の日本都市を現出し内外來遊者をして驚嘆せしむるのである、左に家屋の種類、棟數、坪數及之に要したる建築資金を示せば

府の管掌する所であつて州内を大連旅順の二行政区劃に分つて民政署を置いて専ら其衝に當らしめて居るのである、當市の行政機關は大連民政署であつて警務、稅務、教育、產業等に關する一切の行政事務を管理して居る、大正四年には特別市制を布いて以來完全なる自治制を組織したのである子弟あるものが新土に赴かんとするのに最も頭を悩ますものは教育である、教育機關として大連には小學校五(高等小學一、尋常小學四、教師は全部師範卒業生)高等女學校一(都督府の直轄に屬し内地のもの、高等)商業學校二(東洋協會、平田東助會頭)の設立にかゝり本科五年にして卒業生の賣口の良きことは大したものなり其他夜學部があり主として市内の子弟に商業の知識を施す所中には學士連、志人紳士等が孜孜として商事要項簿記支那語研究等に餘念がない)工業學校一(南滿鐵道會社の經營にかゝり南滿州の工業に従事せんとするもの、爲に設けらる)幼稚園一、公學堂一、(支那人教育機關で五百名内外の生徒を收容してゐる)次は衛生、に就て述べよう、人生誠に命あつての物種、如何に飛躍を試みんとしても身体之に伴はなければどうして大志を貫徹することが出来よう、殊に大連は地形上、海陸交通の要路に當つて居るので旅客及貨物の出入が極めて頻繁で氣候、風土は大陸として前述の如く良好なれども吾人内地人に取りては必ずしも良好とは云へない、

さらば之に付ても此地に入らんとするものは詳なる事情を知るを要するのである。施設としては上下水道あることは前述せし如く完全に施設せられ塵芥汚物の集棄並に道路の掃除は日々缺かさず行はれ其他随分見るべきものが多いので一般健康状態は不良ではない。醫療機關としては滿鐵の大連病院(規模極めて大、百般の設備遺憾なく博士丈にても九名あり入院料は特等七圓、一等四圓、二等二圓三十錢、三等一圓卅錢、特等八十錢)官立の避病院たる大連療病院其他大小病院枚擧に遑がない。當市に於ける大正六年中の患者は次の通である

の而も大規模なる遊園地がある先づ西公園、市の西部にあり輪廊極めて廣く中に溪流あり丘陵あり旗亭あり競技場あり今や楊柳、胡桃、彌茂り風致益加はるのである試に杖を曳きて山巔に上れば千里一眸に集まり俯瞰すれば大連の全市を脚下に見るなぞ四時の遊覽佳ならざるなく清趣眞に掬すべきである。北公園、は露治時代の創設で噴水、花卉、温室、運動場等の設備があつて、亦好箇の遊園地である。松公園、は松樹蒼鬱として四時常盤の緑の色深きが爲め其名がある。電氣遊園、は西端高地にあつて大連を一時の裡に收め大連灣を眺め眺望又佳である、園は電氣鐵道の附帶事業であつて電力の應用が備はつて花園、動物園、温室、遊戯場があり全園イルミネーションを點して北公園、松公園と共に滿鐵會社の經營する所である。(以下次號)

りたるやと問はれし時、アイドントノ一位置にてすまじらば、我輩は林業家なりと稱して大道を濶歩すること難かるべし。左に余が聊か知れる所を記して諸彦の一察に供せん

森林家としての常識

立道 清楓

我々が日常使用し又よく目に觸るる器具に付、之は如何なる木にて作りたるものなりや?等につきて考へ、若し疑問があれば知人或は書物にて質す習慣をつくれれば、自ら趣味の起り来るものなり、又我々林業家の常識として深きはいざ知らず、或程度迄は知り置く必要あり、例へば人に之は何で作

製圖板は針をさすに容易なるものを要すひのきの糸柱を最上とし、かつら之に亞ぐ。又さらさらをひのきに代用す。ほほのきは木理の部分少なく堅く針を挿しにくし。道具の柄に適するもの。手鍵の柄、庖丁の柄にはほほのきを用ふるは、手に豆を生せざるを以つてなり。鉛筆に適するもの。びやくしんを最上とし、あらゝぎを代用す。ほほのき、かつらは劣等品なり。寫真器械用材。暗箱には、マホガニー、たまぐす、みづめ、さくら、しうり、くるみ、を用ふ、マホガニーは舶來品に多し、たまぐすは木目マホガニーよりも密なるも、塗上げて之に酷似するを以つて費用せらる、みづめ、さくら、しうりは普通品に用ふ、みづめは狂ひを生せず、たゞし脂を生じ塗上げ宜しからず、さくらも亦狂わざるも塗る時は目死す、しうりは細工容易にして仕上げ美なるもくるみ多し、くるみは特別注文ある時に限り用ふ、要するに暗箱はマホガニーを以つて上とし、たまぐすを以

つて中としさくら、みづめ、しゅうりを以つて下とす。大箱はけやきを可とするも北海道産しほちを之に代用す又室内用のものはけやきを用ふ、焼梓はほのき、かつらを用ふ共に狂ひ少なし、種板掛はかつらのみを用ふ、『バット』は四つ切以上は木製の箱にして漆塗となす、ひのきを上等とし、かつらを普通とす。

時計枠用材 ほのき、かつら、くるみ、くろがき、さくら、けやき、もみぢ等にして、たも、ひめこまつ等は今日使用せず、枠の主なる部分、ほのき及びかつらにして、ほのきは全体の九割を占むといふて可なり他の樹種は縁其他の裝飾の部に用ふ、米國製のものには練心には砂糖まつを用ふ張付材にはマホガニー及紫檀及くわ材に酷似せる不明の材を用ふ。

印刷用材 伊豆三宅島及御藏島産のつげを用ひ其の木口に彫刻す、つげの印刷に適するは木の目締り堅軟の別なく平等に堅きにあり他の木材なれば年輪の境界部のみ堅く、その他の部分は軟きを以つて、微細なるものを彫ること能はず。小印材は枝材亦是屑材を使用す認印、科目印、薄記用印の如き之也、其の他は丸材を割りて用ふ、生木を使用する時は光澤を生せず、又小木には光澤なきも大木には光澤あり、薩摩産のつげは木理疎に

して材質平等ならず。將基駒用材 まき、やなぎ、くろがき、ねんじゆ、さつまつげ、つばき、ひらぎ、からくわ 駒の材料は材質堅く色澤美なるを好み、又使用するに随ひて益々材色を發揮するものを尊ぶ、つげは最も此の目的に適するもの、如し。

銃床用材 イ軍用銃床 をにぐるみ、ぶな 砲兵工廠にては將來みづめ、櫻、はざくらに就て試験する見込なりと、銃床材としての用件は強靱にして狂ひ少なきこと、軽きこと、龜裂を生ぜざること等とす、此等諸要件を満足せしむるものは、くるみ材を以て他に求むべきなし、然るに該木缺乏の爲め日露戦役の際よりぶなを使用するに至れり、元來ぶなは質劣等にして、くるみ材と比較すべきにあらざり獵用銃床 くわ、くるみ、はなかへで、ほんもみぢ、くろがき、あかざし、紫檀、黒檀、以上は主として内地製のものにして、舶來品は主として、くるみを使用せり。

玩具空氣銃々床 ほのき、かつら、しゅうり等にして、要するに價格廉にして製作容易なるものを用ふ。……(未完)……

いたします。唯自分が幸にして不具者にもならず比較的早く全快したことを御知らせ致したいのです。 ○感想 私此の貳ヶ月間に種々な問題に逢着しましたが、茲には其の根本問題とも稱すべき人生問題に就いて述べたいと思ひます。そこで自分が死より脱れたことを覺つた時に頭に浮んだのは何であるか、どんな問題なのか(こは誰しも考ふることだと思ひます)それは申す迄もなく、自分は何故生きたいのか一體何の爲めに生きて居るか、換言すれば自分の生活の價値果して何であるか、自分は果して生きて行く丈の價値がある者であるかもし有りさすればそれは何であるかと云ふ問題なのでした。これは一見して吾々の現實生活と甚だ離れて居る様であるが決してさうではない、この問題は一切の事件の根柢に横はって居る、何故なれば若し吾々のライフにして空無な幻影であるならば吾々一切の社會問題も日常生活も凡てはみなつまらない虚偽に過ぎないからである。未だ自己に目ざめないものは暫らく問はないとしても、苟くも少しでも眞面目に生活の事を考ふる者にとつては先づ第一にこの根本問題に觸れねばならぬ筈であります。そして實際この根本問題の解決が着くまでは、即ち自己の生存の價値を見出すまでは、一切何も手につかない程無力になるものであります。 私は丁度滿三年前(母校三年當時)この問題

に觸れて以來今日迄哲學の方面に其解決を求めて居ましたが、何等得ることなく却つて人生の空無を強く感じ遂にアブノーマルな頭になつてしまいました。然るにはからずも今回生死の大難關に起ち、再び這般の問題の追求にかゝらねばならなくなりまして、生は遂に死である、空である、幻影である、云ふことがどうしても頭から離れない然しそれは既にソロモン之れを語り、釋尊既に之れを悟り、シヨペンハウエルまたこれを祖述して居ります。まことに然りとすれば解脱より外に生活の道がなく、自殺より外に人生の眞の仕事はないのであります。而も尙自分は死にたくはない生きんと欲する内心の絶對の聲をききました。茲に何等かの秘密がなければなりません。これ私が根氣強く人生の意義を求むる所以であります。そこで私は方面をかへてトルストイの研究にかゝりました、幸にして彼は良く私の質問に答へて居ります、彼は最初科學に其の救を求めましたけれど、科學はたゞ枝葉の知識難多な事實を説明するばかりであつたので、更に彼は哲學にその解明を求めたけれど哲學の答へ得るところは人生の空無を教ふるに過ぎなかつたのです。 『それでは何故生きねばならないのか』と問へば『そんなに生れたのだから仕方がない』と答へる程度のものに過ぎなかつたの

です、而も彼の内心は生活の意義を求めて止まない、生活の價値を求めてやまない、科學や哲學に満足することの出来なかつた彼は遂に此の意義をライフそのもの、門に叩く様になつた。彼は一步その眞實に近づいて居る、彼は先づこの人生が明白な空無なるにも拘らず、尙殆んど總ての人類が死なないで生きて居ることの不思議を思はないで居られなかつた、そこに何等かの秘密があると思つたそこで彼は學問や知識を捨て、直接人生そのもの、探求にかゝつた彼自身の屬して居る階級の人々の心持の觀察が初まつた。 彼はそこに四種の人の存するのを思つた、第一は人生の空無を悟らない無智の人々であつた、第二はこれを悟つても成るべくそれには眼を閉ちて只管に華やかな歡樂を追つて行く人々であつた、第三は自らこの幻影の生活を絶滅さすところの強い人々であつた、第四は自らを處置し得ないで愚圖つて居る人々であつた、而も答はそこから生れて來なかつた彼は語つて居る。 人生の意義の解明に就いては知識は遂に無力であるけれども、それにも拘らず人生全體としては宛然その意義を了解して居るかの様にその生長をつゞけて居る。 殊に知識階級のものよりも無智な階級のものが多い多く人生の意義を解して居るかの如くに見るを以て彼等をしてかくの如くに生かして居るところのものは信仰その

文苑

所感一片

飯沼生

○私の負傷の一件が今度林友誌上に發表せらるゝに及び、幾多の同情ある諸兄の御見舞に接し實に感泣して居る次第であります元來私は文を綴ることが出来ない哀れな性分なので、今迄何か書かう書かうと思つても遂ひそれを果したことがなかつたが、今日と云ふ今日は是非共、書かねばならない破目に立至りました。否書くことが自己の義務であり使命であると信するからであります。 (それは負傷の經過を述べ併せて其の當時の感想を披露し御配慮を賜はりし諸兄の御心を安からしむるに共に自分として一言御挨拶申上ぐる云ふ点に就てであります) 經過、過ぐる三月二十日大正八年度收穫豫定個處調査(測量)中約三十間の絶壁より墜落し氣絶し昏睡状態一前橋赤十字病院入院一歸省母校訪問一入湯生活(松本市郊外山邊及び淺間温泉に)一善光寺開帳參拜一等の種々なる生活を送りました。其間滿貳ヶ月病漸く癒へ去る五月二十日再び高崎に歸ることを得たのであります。 以上は經過の極大要です、詳しく申上げたのですがそれを申上げた所で別に裨益するところもなく一種のゴシップ的な物語りとなり、あたら貴重な紙面を穢すのみですからこれは諸兄の御推察に委せて置くことに

ものである。開關の初めより人を生かし、如何なる國人をも生かすところの大なるこの信仰とは何であるか。余は信仰とは見ざるもの、把握であるばかりでなく、啓示であるばかりでなく、人と神との關係といふことでもなく又屢々了解された様に黙従することでもない、信仰とは夫れによりて人が自らを破壊せずに行ける所の人間生活の意義の知識である信仰は生物の力である云ふ事を了解したと彼トリスホイは云つて居る、けれども彼は此信仰の實際の力を彼自身の階級の中に見出すことが出来なかつた、彼等の信仰はほんの飾物に過ぎなかつた、彼等の信仰と彼等の生活とは全く離れつゝになつた別種のものである眞實の信仰は只憐なる貧しき民衆の中に殊に農民の間に存する、彼等に於ては信仰は即ち生活である、信すること云ふ事は生きる云ふ事である、生くと云ふ事は信すること云ふ事である夫は上流社會に於ける様に一つの裝飾品ではない、生活の爲には絶對必要のものであるとして夫のみが彼等に生活の意義を與へ生存の力を與へる、彼の觀察は恠う云ふ風に行はれた、彼は益々農民に引き付けられた、そして農民に接すれば接する程そこに眞個の生活を見出す様になつた、然し實際、農民の中には生活即信仰と云ふ様な人もあるだらうが寧ろ「人生の空無を悟らない無智の人々が多い」と私は反駁せずには居られなかつた。

た。人生の意義生活の初まつてから此方生活の自覺の生れてから此方それは誠に埃及のメソポタミアよりも尙解し難く希臘の迷宮よりも尙わがかり難い問題である人間が自ら生きて居ながら尙も其意義を了解して居ないとは何といふ矛盾であらう、而も吾々はこの不可解の迷を解かねばならぬ。人生の意義は別に高遠な思想や學問の中にあるのではない、夫は只鳥や獸や虫の様に人間に備つた自己の本来に生くればよいのだ然し「人生の目的は何か」といふ問に對しては少くとも之では不十分であるけれども吾々は先づ人生の目的は何かと問ふ前に「一體自分はさうすればよいのだ」と問はねばならぬ、それがより根本的な疑問である、そしてその間に答へる唯一の答へは「た前は生かねばならぬのだ」といふ。かの不可抗な自己内心の嚴然たる命令である、さうだ吾々は生かねばならぬ、吾々はこの生れくるさういふ事から外へは一步も踏み出す事が出来ぬ何故なれば一體「人生の目的は何か」とか「さうすればよいのだ」と訊ねて居るものは何であるか夫こそ自己の眞實に生きやうと欲して居る所の自己にある生命其ものであつて、さう尋ねて居ること夫自身彼の生きて居ると云ふことであるからである。吾々は如何に人生の空無を感じて夫から解脱しようと思つてもその解脱をあせて居る所のもの夫自身の嚴然たる生其者でないか、だから、さうしても吾々は

此の生から脱れ得る事が出来ぬ、あせればおせる程、その生は益々活躍するではないか夫は絶對である吾々は決して此生を完了せしむることは出来ない。然らば吾々は遂に此無益な反抗を止めねばならぬとして大人しくこの如何ともするこの出来ぬ生に臣従しなければならぬ、其生命の本来に服従しなければならぬ、恰も一つの種子になつた生命が芽を出し莖を出し葉を出して本然的に開發してゆく様に吾々自身もなつた生命を本然的に開發せしめねばならぬ。生命の本體は譬へば一本の木の本葉でもなければ花でもない又枝でもない幹でもない本體は幹となり枝となり葉となり時が来れば花となり果となり序々に開發してゆく所の目に見ぬ手に取る能はざる不可思議な常に流動して居る「ある力」である吾々は此「ある力」から解脱することは出来ない何故なれば吾々は此「ある力」そのものだからである。人生の意義は此「ある力」を本然的に生きる所にある、生き得た時にのみある。「此ある力」の流動之をベルグリンは生命の持續と云つたり生命の流動と云つてゐるそして生命の本體は此流動そのものにあると云ふのである。要するに私が今度の負傷によつて痛切に感せる人生問題の歸着點は「吾人は須らく自己の本来に生きよ」と云ふ事である何故な

れば吾々の生活とは此實在的な生命此純粹經驗の自我の持續の自己啓示だからであるかうして其秘れたる自我の本質を序々に開發して行くのが吾々の生活其者であるからである然らば吾々は人生の目的は何ぞと問ふ前に此生命の本来に生くればよいのである而して其本然は序々に開發され擴大されるのであるその行先が睡眠の様は自我の意識の絶滅であつても、死の暗黒が吾々に虚無を齎しても、元來もつと本質的に究極するならば生命の本體はたどひそれが吾々にとりて持續であり流動であるとしても元來は無色無相の沈黙であるからである、此沈黙境こそは彼の言ひ盡絶の不可思議境であつて一切を包蔵すれども一切でない所の生ける虚無であるからであるとしてそれこそ不生不滅の實在であるからである。私が今迄、生の行先に只破滅と空無とを見たのは生、それ自らがその様な幻影であつたからでなく只己の眠が肉體的又は外的現象にのみ汚れて居たからである、一度目がさめて内部から生命を見内的に此生命の本然的に生くる時私はそこに生の空無を見る代りに永劫を見るのである。人生には目的がない唯此本然に生きる道程がある、本然が吾々を吾々として生かす「この力」夫自身が人生の目的其者である。私が此立脚地から吾々人類世界を見る時人生の空無を悟らない無智の人々の集團であると最初思つたのは誤であつたことを自覺

した、單に人類のみならず草や木や鳥や獸乃至宇宙の萬物も皆一樣に矢張りこの本来に生きて居るのだと思ふ。(完)

芭蕉の句に曰く「やがて死の景色も見えず蟬の聲」と。
青木忠太
浦島子のそれにあらねど昨日の紅顔、今日白髪、過來し方を顧みれば茫として夢より淡し人生五十の生涯、貴賤、境遇は暫く措くとして、笑ひ暮らす人泣いて日を過す人、不平の中に日を送る人、甘き酒に酔へるが如く夢から夢に消へ行く人、激しき競争場裡に高く歌ひて進む人、いづれも食ひ生き死して土となり終る迄、何處の地も仰ぐ日、天輝る月は一なれども、人は千差萬別なり。俗諺に「泣いて暮らすも一生なら笑つて暮らすは身の徳か」と、此れ醉生夢死の徒の痴言か。
されど人は欲望の爲に生きるものなり「駕籠に乗る人擔ぐ人、肩の痛みに聲の痛さよ」營々として一生を谷に埋もれて炭焼く人、此の世をば我世こそ思ふ望月のと嘯く人、俯して見る谷も深からんも仰げば青空のこころ果しなく限なし。
歐洲の天地を震撼せしめし蓋世の英雄奈翁も燃ゆる野心をセントヘレナの孤島に埋めて、全歐の地圖を按じ無念の恨を呑んで鬼と化せしに非ずや、榮華を一身に集め豪奢意のまゝならぬはなく阿房宮裡に花の如き

三千の美女に擁せられて不死の薬を求めし始皇も、秋風の不安、不平の悶を必ずしも感せざりしに非ず、滿腹の愛に抱かれて高樓に居り綾羅を纏ひて世の子女の羨望の的となれる佳人も尙往々にして世を呪ひ賤が伏屋に柴焚く程の人を羨む者少からざるは何故ぞや、之れ月に叢雲花に嵐の理にして意のまゝならぬは世の常なり、必ずしも「上見れば限もあらぬ世の中に下見て咲く百合の花哉」を忘れしに非ず、自ら求めて苦を取り快を捨て、採らざるなり。
夫の薔薇の縫取りを見よ、天使の唇の如き花を縫ふ糸も、陰險手を刺す針を現す糸も、裏を返せば同一なり、知らずや觀樂の反面には必ず悲哀あり、勝利の下には常に犠牲が横はりて幾多の慟哭、血涙の永遠に埋もれ居るを、相國入道が榮華は嫡流の愛子、一世の儀表として上下の望みを一身に負へる一門の柱石たる小松の内府を犠牲とせし悲劇の幕あるを。
波なき河も水は流れ、深く探らば何れの地にも暗涙は潜み居るものなり、清く磨かれたる鏡の裏は愈々黒し。凡世の中の事何事も表裏同じからず光明の側と暗黒の側はあつたものなり「苦は樂の種」「今日の努力は他日の報州」之れ表裏なり苦痛努力は暗黒の側にして、報酬歡樂は光明の側なり。即ち物事は勤めて光明の側のみを見れば、苦痛は變じて快樂と化せん、よし化せずとも薄ちぐるを得るは難からず。

世を擧げて向上の鐵槌を振つて進む所謂成功熱に反抗し、世に取殘されて二世を不可とし不平煩悶に日を送る世の悲觀者、暗黒面より一轉して光明の側を見よ、心の暗より一道の光明を認め希望蘇りて活路開け、心も廣く明るかるべし、虚しく下るも盈ちて上るも等しく同一滑車に懸る釣瓶の行程ならずや下るを厭ひて止まらば安んず上る業を得ん上るも下るも又樂しからずや、是は努力奮闘の高塔を米國の大地に等き上げたる岡本米藏氏が著作筆筒の中に説きし言なりよくよく味ふべし。

だ。事々に光明の側を見て感謝と満足とを求めし老爺の心中は何等の煩悶なく不平なしと云ふべし。見よ行き暮れし旅路の暗る探し求めし一点の燈火の、如何に力強く不安の暗を照すかを疲れし足も軽く、心躍りて一氣に飛び立つべし。光！光！近きは日々の物事の光明の側の光、遠きは希望の光、理想の高嶺に輝く光、千古變らぬ聖人の教の光、法の光、黒海の燈臺の光！

柔術とは 不二川生

抑も柔術とは如何なるものか、武器を用ひずして力の弱きものが強きものと戦ひ之を能く防ぎ能く勝つ術にして、即ち力を以て敵の力に反抗せず却つて敵の力に譲りながら終局の勝利を制するものである。武術には種々精巧なる器具に依らざれば如何なる達人と雖も其術を達し得ぬものがある、然るに柔術は器具と名付くるものは一切要せず、全く空拳徒手にて克く之を行ひ得るの術である、柔術は毫も器具の力を藉らず心身の力のみを以て行ふのである故に隨時隨所にて克く業を施し得るのである敵を防ぎ身を護る点に於ては柔術も他の武術も殆んど異なる所がない、然し身心の鍛練



は他の武術とは異り手業、足業、腰業、棄身業等ありて全身の筋肉を平均に運動せしむるが故に頭から脚は勿論四肢に至る迄平均に發達を促す、其れと同時に敵に對抗するに武器に依るの念を起さず爲に、至誠、勇猛不羈獨立の思想を養成し完全に身を鍛練し得るのである、之が柔術最終の目的とするところである。要するに柔術は身心鍛練の捷徑にして武術の根本とも云ふべきものである。元來柔術は我國特有の技術であるが其始祖の何人なるや又何時頃よりの術なるやは未だ判明せぬと云ふ。然し身の防衛を人生自然の性に基づくものである故其起原は未だ武器の出來ぬ以前に於て既に行はれたるものと思はれる、現今世界各國にも柔術に類似したる術は數多あるも我國の柔術の如く發達せしもの無きは此理由に外ならない。現今の我國に於ては都鄙到る所盛んに柔術練習の聲を聞く様になつて來た、將來に於て大業を成さんとする吾々青年たるもの、之を修めて元氣を旺盛ならしめ大いに身心の發育を計り以て他日の備としたるものだ。

和歌

旅行詠草 新家園面

もみぢにもたどらざりけり山吹の山のあたりは若葉しげりて 牛をかふ人やすむらん紅のかすみまがふ桃のひと村 八ヶ岳みなみにひける山の尾をはるかに見つゝ甲斐に入るかな ますらをがすぐれし魂もとまるかと思へば たかし甲斐のむら山 なまよみの甲斐路をゆけばふしがねにあらそい立てる白根連山 かきさし、畫板のもとに繪師ひとりひるねしてあり三保の松原 羽衣の松の木かげに石文をわがよみをればかをる海風 伯良の宿やいづことたはぶれにとへごこたへすあま乙女らは 稍みな青葉になりぬ箱根山われよりさきに春はこけけむ 老をなく山うぐひすの聲はして關のふる道あふ人もなし 箱根路をわがこねくれば山のやどの茅屋にさけり一八の花 あらそひし神の昔をあふぐにもいよ、かしこきふたあらの山 山づみの神のいぶきのたろしきて霧にくもる三荒のうみ

雜報

學校便り

○修學旅行了る、本年の修學旅行は鐵道院の都合に依り二年生は五月二十日三年生は全二十一日に出發せるが何れも豫定の旅程を終へ二年生は五月三十日、三年生は六月七日無事歸校せり ○中村林學士新任、北村教諭の後任として五月三十日着任せる中村教諭は大正二年東大卒業の林學士にして大阪大林區署技手、富山小林區署長等に歴任し今回我校に來任せらるゝ事となり六月十日講堂に於て新任の披露式を行へり ○辭令 一級俸給與 (五月三十日) 中村教諭 十級俸下賜 (五月十五日) 新家教諭 全、上 (五月三十日) 西澤教諭 五級俸給與 (五月十五日) 島内教諭 六級俸給與 (五月三十日) 宮川教諭 月俸十圓給與 (五月三十日) 武居助手 月俸十圓給與 (五月三十日) 沼田書記 ○校友會顧問、新任中村教諭は辯論部顧問に任命せられたり

會員消息

○瀨在實君、今回靜岡縣田方郡技手に任せられたり ○帝林局木會支局管内に入れる諸君左の如し 上松出張所 長谷川 毅君 三留野出張所 千村彌之助君 玉瀧出張所 加藤源一郎君 野尻出張所 百瀬 三一君

○樋口勵君、今回松本小林區署稻扱保護區詰を命せらる ○恩田司馬之助君、鳥取縣日野郡林業技手に轉任せらる ○宮崎光治君、大町小林區署雇を命せられたり ○坪倉藤三郎君、今般山浦と改姓せられたり ○星加正雄君、甲種歩兵に合格、五月末朝鮮京畿道抱川郡蘇屹面總督府光陵林業試驗場に赴任せられたり ○日野櫻亮君、秋田縣北秋田郡長木村藤田組長木澤製材所に赴任せられたり ○久保田吾良君、岐阜縣技手に轉任、主として雜誌林業編輯の任に當らるゝ由 ○不免修六君、鳥取縣八頭郡役所に就職せらる ○細窪友一郎君、札幌帝林支局深川出張所に赴任せらる ○藤田要吾君、今回山林屬となり若松小林區署在勤を命せらる ○今井忠雄君、今回東京大林區署に赴任せられたり ○古根勳君、新嘉坡三井護謨園に赴任せらる ○村上英勇君、今回和歌山縣東牟婁郡小口村なる藤田組小原伐木所に轉任せらる ○宮島岩見君、五月中、日立鐵山を辭し歸省せられたり ○唐澤松男君逝く、一年生唐澤松男君は入學以來脚氣に罹り居りしが六月十日に至り俄然肺炎を起し爾來寄宿舎に在りて治療を盡し兩親を始め兄弟親族の篤き看護を受け

十五日朝歸郷せるが病勢革まり遂に不歸の客となられたり因て香奠として校友會よりは金壹圓、一年級よりは金貳圓を贈ることとし十六日小貫級主任、及一年級長村松、副級長小幡の三名持參、弔問せり本會は茲に謹んで哀悼の意を表す

長野市蘇門會便り

五月九日より十一日に至る三日間長野市縣會議事院内に於て、縣下各小林區署長、御料局出張所長、各郡林業技手、郡駐在縣林業技手の林務主任會議の開催、多數同窓の集ひを期とし、十一日夜市下一流の富貴樓に於て、一大蘇門會を開催す。會するもの左記二十餘名にして、安藤林務課長、西澤木會山林學校教諭を來賓とし例により蘇門式の大いに喰ひ、大いに歌ひ、大いに飲み而して各人の隠藝出で中にも喝采を得しは、廻廻し、手品、達磨踊、等にして、アワヤ二階も落ちんとし斯くて十二分の歡を盡し午後十時安藤課長の萬歳にて散會せり

- 小林區署側
齊藤正雄君 金井澄水君 關琴義君
藤原幾喜君
縣 側
溫井誠一君 倉科浦一郎君 原田久保作君
郡役所側
平田稻男君 但馬廣造君 脇田義正君
東原智君 仲田惠令君 仲俣信市君
郡駐在側
柏澤國治君 佐藤一郎君 西尾嘉一君
種倉隨藏君
飯山警察署部長、中澤揚君、上高井郡高井村役場 岡田恒治君 上水内郡淺川村役場 萩原惠治君、小縣郡長瀬村 大森悦君

林友代領收報告

- 金壹圓五拾錢 篠原忠治君
金七拾貳錢 小瀧升太郎君
金七拾貳錢 坪倉藤三郎君
金壹圓 甲田林君
金壹圓拾六錢 小林秀一君
金壹圓 篠原善一君
金五拾錢 千村善三君
金壹圓 松本清太君
金壹圓 野村智人君
金貳圓五拾錢 横山治藏君
金七拾貳錢 大島角久君
金七拾貳錢 岡武國君
金參圓 倉澤建雄君
金七拾貳錢 前田正義君
金壹圓 溫井誠一君
金五拾錢 澤柳壽夫君
金七拾貳錢 松館藤太郎君
金壹圓拾六錢 丸山金三郎君
金壹圓 北村竹次郎君
金七拾錢 宮崎惠喜太君
金七拾錢 竹内房太郎君
金貳圓 金田美行君
金壹圓 伊東兵太君
金壹圓 脇田義正君
金壹圓 宮澤嘉一君

○雜誌部へ寄附
北村教諭は退職の際校友會雜誌部へ左の通り寄附せられたり
一金貳圓六拾五錢

内藤先生謝恩金領收報告

- 金壹圓 德武國久君
金壹圓 田近善右衛門君

北村先生謝恩金領收報告

- 金參圓 田近善右衛門君
大場先生謝恩金壹圓 田近善右衛門君
福山先生謝恩金壹圓

寄贈品目

本校第九回卒業生木下稗藏氏の入社せる横濱市神奈川臺下大日本水道木管株式會社より今回左記木管を參考の爲寄贈せられたり
一、高壓用木管 一本(内徑三吋、長サ六尺)
一、普通木管 一本(内徑四吋、長サ六尺)
一、二重保護木管 一本(内徑六吋、長サ六尺)
一、捲切木管 一本(内徑八吋、長サ六尺)
○北村元教諭、當分の間東京駒場農科大學演習林本部に就職することとなり此程上京の由通知ありたり

内藤兩先生謝恩金募集廣告

北村 拜啓陳者内藤先生には明治四十三年以來教授囑託として北村先生は明治四十四年以降教諭として本校の爲御盡瘁下され候處今回内藤先生は御都合に依り職を辭せられ北村先生には御病氣の爲退職致され候に付ては此際謝恩金を呈し聊か兩先生の勞に酬ひ度と存し候間左記御諒知の上應分の御寄贈に預度此段得貴意候也

卒業生各位

大正七年六月 校友會
一、振替にて御送金の節は東京一七六〇〇番木會山林學校宛のこと
一、締切期日は七月十五日限
一、領收證は不差上林友誌上にて御報可申上候

長野縣四筑摩郡福島町四〇番地 編輯兼發行人 安井正夫
長野縣四筑摩郡福島町五七〇番地